

あなたは、何処で美術を鑑賞していますか？

画廊派、美術館派、市民ギャラリー・・・それとも自宅？

一般の人が美術に接することができる場合は、街の画廊、貸し画廊やアートスペース、国立や自治体・市町村が運営する公立美術館、企業や財団が運営する美術館、個人の美術館等々いろいろです。もちろんコレクターとして美術品を所蔵し、自宅で楽しむことができればよいのですが、やはり庶民は地域の美術館等を利用することが多いと思います。

私は現在横浜に住んでおります。近場ですと横浜、渋谷、恵比寿、六本木、木場、上野の公立美術館や企業美術館によく行きます。大概是企画展を鑑賞しに行くわけですが、銀座での個展DMをいただいた時などは、周辺の画廊に立ち寄る場合もあります。

銀座の画廊はバブル崩壊後、様相が少し変わりました。貸し画廊が増えたためか、個人的には個性がなくなり平準化したと感じています。廃業した画廊もありますが、とは言えそれぞれ洋画に注力していたり現代アートに注力していたり個性があり、何度か訪問すればその画廊の傾向と、自分の好みが合うのかは、すぐ分かると思います。80年代は銀座の日動画廊、サエグサ画廊、南天子画廊、番町画廊、弥生画廊、兜画廊、青木画廊などによく行っていました。今でもそうですが、ばったり有名人に遭遇するなど、違った楽しみもありました。

画廊の場合、「声を掛けられたら何か買わなくてはいけない」と躊躇する方も少なくないようです。画廊からすれば鑑賞だけでも次の購買、馴染みに繋がると考えていますので、大いに行かれるとよいと思います。画廊の方や作家の方と直接話しができますし、作家の拘りなど、思いがけない情報を得ることがあります。但しお子さん連れで行かれる場合、小学生の低学年以下は、画廊に限らず展示サイドから見ると危険人物、(何をしでかすか分からない) 怪獣ですから嫌われています。老婆心ながら、十分注意した方がお互いのためです。関連情報として、画廊について一般庶民の視線でその利用や活用方法を説いている山本冬彦さんの『週末はギャラリーめぐり』が参考になると思います。

また、私は画廊、貸し画廊、企業美術館と公立美術館を次のように位置づけています。

- ① 画廊は、その画廊（市場）の好みと評価の定まった内外作品を扱うお店。
- ② 貸し画廊は、中央を目指す若手や愛好団体・日曜画家の発表の場。
- ③ 企業美術館や公立美術館は、内外で評価が定まり価値が安定した作家の作品を収蔵するところ。

以上の違い、つまり「場」のヒエラルキーをある程度理解し鑑賞していると、結果的に美術界動向の一端を知ることができますので、鑑賞眼も鍛えられることでしょう。上記の判断要素、“評価と価値”については、さほど異論無きものと思っています。

いずれにしても、美術観賞の場として東京を改めて見直すと、地方都市と比べるとやはり特別なところといえます。世界的に見ても、実に充実した環境だと思います。

他方、日本の地方に住まわざるを得ない方々には、地の利という意味でハンディがあると思いますが、中央進出を狙う若手アーティストが地元の画廊等で行う作品発表も盛んです。また昨今は画廊ネットワークが充実しており、ネットで国内の様々な画廊情報を得ることができます。これらの情報を活用すれば、誰でも平等に、素晴らしい作品との出会いを得られるでしょう。

「芸術・美術・アート」のイメージは人によって違う、言葉の意味を見直してみると

ここで「芸術・美術・アート (ART)」の語句や言葉が“何を意味しているのか”を改めて定めておきます。本稿では、以下のアンダーライン部分の意味を、それぞれの語句の基本と定義し、駒を進めて行きたいと思います。

芸術： 1 特定の材料・様式などによって美を追求・表現しようとする人間の活動。および、その所産。絵画・彫刻・建築などの空間芸術、音楽・文学などの時間芸術、演劇・映画・舞踊・オペラなどの総合芸術など。

2 学芸と技術。 *参照、大辞泉

美術： 視覚的、空間的な美を表現する造形芸術。絵画・彫刻・建築・工芸など。明治時代は、広く文学・音楽なども含めていた。 *参照、大辞泉

アート： 1 芸術、美術；(集会的) 芸術作品、美術品

2 技術、こつ、要領；(…の) 術(of ...)

3 (～s)人文科学、教養科目；(主に英)文科系 (の学生)

4 人為、技巧 (⇔nature)；

(ふるまいなどの) 不自然さ、作為

5 狡猾、策略

6 (集会的)ジャーナリズムさし絵、カット

7 (～s)芸能界、ショービジネス 8 (米俗) (警察で) 手配写真 *参考、e プログ

レッシュ英和中辞典

語句や言葉としての「芸術」と「美術」については、美術の専門家はアンダーラインを引い

た箇所の意味合いで、それぞれを理解し日常的に使用されていると思いますが、一般的には“語句”に対する具体的な理解とイメージが、定まっていないと思います。

個々人の年齢や、その人の職業や立場に影響され、言葉の発するイメージにずいぶんと幅があると感じています。例えば、音楽業界の人と美術業界の人がイメージする「アーティスト」の具体的なイメージは、それぞれ“歌手”と“画家”と直感的に捉える人が多い、と実感しています。

さらに言葉の奥深さという視点で、英語の ART を注意深く見てみると、5 番目に“狡猾・策略”という意味合いがあります。鑑賞者が芸術の存在についてその作品から読み取るもの「あるいは何故このように表現されたのか」、その本質は何かと考える時、人はその作品の背景を注視すべきである、と示唆しているよう思えます。特に、疑うことを忘れている日本人には“西洋で生まれた芸術を逆説的に捉えることが重要である”・・・その必要性を暗示しているように思えるのです。

つまり“社会状況を反映している芸術作品をしっかり受け止め、世を読み解くことのできる人々を増やす必要がある”と理解すべきなのだ、と私は考えています。

また、伝統芸術、装飾美術はなんとなく分かるけど、純粋芸術・美術って何だ・・・などと疑問に思われる方も多いと思います。

専門的には「大衆芸術(popular art)」に対して「応用芸術(applied art)」、「純粋芸術(fine art)」を区別しています。大衆芸術は大衆文化に根ざした映画などから発生した概念で、受けての人々が容易に理解でき、一般の地域文化に溶け込む「作品や活動等」のことをいいます。他方、応用芸術は、実用的機能と芸術的な美を併せもつもので、工芸や装飾など、「生産を伴う」ことをいいます。また純粋芸術は、制作する側が自ら芸術的価値を見出し、「その価値を世に問うための創作活動等」を含めた概念で、「芸術」と同義です。

さて、あなたは何処で美術を楽しんでいますか?そして目の前の美術品は、芸術・美術・アートのどれですか・・・?